

翻訳の可能性 : 『小公女』からロマンス小説へ

宗意, 和代 / MOTOI, Kazuyo

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

141

(発行年 / Year)

2015-03-24

(学位授与番号 / Degree Number)

32675甲第344号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2015-03-24

(学位名 / Degree Name)

博士(学術)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00011756>

博士学位論文
論文内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	宗意 和代
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	第 560 号
学位授与の日付	2015 年 3 月 24 日
学位授与の要件	本学学位規則第 5 条第 1 項(1)該当者(甲)
論文審査委員	主査 教授 田中 優子 副査 教授 竹内 晶子 副査 社会学研究科教授 金原 瑞人

翻訳の可能性—『小公女』からロマンス小説へ—

この論文の方法と意義

本論は従来の文学論ではなく、翻訳論である。つまり作品そのものを論じるのではなく、その作品がどのように翻訳されたか、原作の背景と、翻訳の背景にはそれぞれいかなる事情があり、それがどのような「ずれ」として表現されたか、をテーマにしている。またそれは、原作者の背景と翻訳者の背景としても、語られる。翻訳は、翻訳できなかった部分を含む。同時に、原作者が意図しなかった読みの誘発も含む。どちらも誤解ではあるが、それがより豊かな誤解になる可能性がある。本論はそれを指摘している。

また本論は、大衆文学論でもある。翻訳文学は近代において、エリート層の小説を生み出す土壌になった。日本のほとんどの近代文学は、イギリス、ドイツ、ロシア、フランス、アメリカなどの翻訳を通して成り立った。しかし本論はそれらを対象とはしない。むしろ児童雑誌に連載された児童文学や、女性のみが受け容れる大衆ロマンス小説を取り上げている。そこに本論の特徴がある。

論文の目次

序章

- 第 1 節 問題の所在
- 第 2 節 研究の方法と目的
- 第 3 節 先行研究
- 第 4 節 本論文の構成

第1章 『小公女』の展開

- 第1節 作品の背景
- 第2節 翻訳の正体
- 第3節 受容の軌跡
- 第4節 読者の世界

第2章 ロマンズ小説の展開

- 第1節 ロマンズ小説の系譜
- 第2節 ロマンズ小説の読者
- 第3節 ロマンズ小説の魅力

第3章 翻訳小説の展開

- 第1節 テーマの理解
- 第2節 ジャンルの成立
- 第3節 翻訳小説の受容

結章

- 第1節 結論
- 第2節 今後の課題

それぞれの章の要旨と評価

序章

・概要

序章の「問題の所在」では、外国作品を翻訳出版する際に作品選定の判断のためにおこなわれる「リーディング」という作業について述べ、何が翻訳されるべきか、という異文化受容の判断には、参照できる具体的な指標が必要であり、そのために翻訳研究が必要である旨を述べている。

「研究の目的」においては、新作の受容が減少している一方で、過去に受容された作品が様々な変容を見せながら求め続けられている現状をおさえ、その事例として1894年に翻訳された『小公女』を挙げた。この作品は複数の翻訳が出たあと、1980年代にアニメ化され、2009年にテレビドラマ化されている。一方、現代社会において新しく受容されるようになった「ロマンス小説」を、現代の翻訳の主力ジャンルと位置づけ、その両者を比較する、という意図を述べる。

すなわち、①古典作品として『小公女』の受容について、明治の版から現代の版まで各訳者およびその読者の理解を推察し、作品がどのようなものとして理解され、また求められたものであるかを知ること、②現代の翻訳小説として、安定した読者数を維持しているロマンス小説について、その成り立ちと特徴を考察し、日本の読者に受け入れられた理由を検討すること、そして③読者が求める翻訳小説の魅力を示す。

以上のように論文の目的を明らかにし、その上で、①②それぞれの先行研究と、全体の構成を述べている。

・評価

序章において評価すべき点としては、この論文の特徴を明確にしていることである。それは、翻訳本の選定にとって参照できる具体的な指標を立てること、読者が求める翻訳小説とは何かを明らかにすること、という、文学論を超えた翻訳の現場に即した研究であることだ。

そのような具体的な目的をもった研究であることを明確にしたことで、「翻訳の歴史」と「ロマンス小説」という、異なるテーマを論文のなかで同時に扱うことの意味を表明している。

しかし第1節「問題の所在」では、研究の目標を出版社のリーディング担当という個人の経験と、リーディングに際しての指標が欲しいという要望に還元してしまっている。その論法は論文にふさわしいものではなく、個人的な想いが根底にあったとしても、より客観的な「問題」の所在を指摘すべきであった。

また第2節「研究の方法と目的」には、「かつて児童小説として受容されて『小公女』を過去の受容の例とみなし、それに対して、ロマンス小説を現代の主力ジャンルとして、それぞれの受容の背景および受容後の展開を考察する。その結果として以下の点を明らかにすることを試みる」(p4)とあるが、それはいささか無理がある。大人向けのロマンス小説の現在とその展開を考察するうえで有効なのは、大人向けのロマンス小説の受容史である。たとえば、本論文でも触れられている『高慢と偏見』は多くの翻訳、抄訳もあり、また翻案もあり、BBCのTVドラマもあり、日本でも漫画化され、さらに宝塚のミュージカルにもなっている。それを児童書の受容史で代替できるというのであれば、その理由が必要であった。

第1章 『小公女』の展開

・概要

「作品の背景」では、『小公女』の著者フランシス・エリザ・ホジソン・バーネットのこと、当時の作家という職業のこと、そして女性の作家がどのような立場であり、どのような位置にいたか、収入、生活など詳細を述べた。

その上で、『小公女』の成り立ちと構造を述べている。その構造とは、ある世界から出発して、別の世界を体験し、最後は元に戻るという円環的な構造であり、主人公セーラは、生まれついた元の階級に戻り本質的には何も変わらない。そこには、どのような環境におかれても決して変わるまいとする姿が強調され、その、自分の信念を曲げず価値観を貫き通す生き方こそ、著者バーネットが望んだものである、と結論する。この結論は、前段で述べてきた、作家の人生の考察に対応するものとして、論じられている。

「翻訳の正体」では、『小公女』がイギリスにおける、植民地問題も含めた階級構造によって出来上がっている「階級の物語」であることを詳細に分析した。本論は翻訳論であるので、これは単に『小公女』の分析をおこなっているのではなく、その階級問題が、翻訳にはいかに「反映されなかったか」を証明したのである。ここに、翻訳のもっている根本問題が見える。

「受容の軌跡」では、その階級問題の翻訳不可能性を含め、さらに詳細に、翻訳の言葉に即して、何が翻訳され、何がされなかったかを示した。ここでは翻訳者の背景も紹介されている。若松賤子、菊池寛、水島あやめ、伊藤整、谷村まち子の翻訳者としての姿勢を考察し、アニメ、テレビドラマにおける翻案に、時代を考察している。時代による変化とは、良妻賢母教育に沿う教訓的なものから、いわゆる児童文学になり、やがて娯楽に変化していく軌跡である。

「読者の世界」では、一作品の翻訳を通じた意味の変化が、いかなる読者および掲載媒体の変化によって受け止められてきたか、の分析である。明治時代の児童雑誌から、次の時代の少女雑誌をめぐる、その執筆者の吉屋信子を経て、戦後、少女雑誌が少女漫画の舞台となるまでを書いている。ここでは、『小公女』が児童雑誌に掲載されたことから始まり、「雑誌」を基準にしてその変化を描くと、『小公女』が、「西洋」を存分に取り入れた「少女漫画」につらなり、それが、次の章の内容である「ロマンス小説」につながる、という「読者」側の道筋が見えてくる。

・評価

この章は、本論文の白眉である。『小公女』論は論文執筆者が、長いあいだ取り組んできたテーマである。初期には「翻訳者論」であったものが、「翻訳の正体」の執筆を経て、「翻訳論」となった。つまり、翻訳とは、「翻訳していない」「翻訳できない」事柄を抱え込んだものであり、それこそが翻訳の正

体である、という本質を具体的な事例で執筆したのである。

本章はその「翻訳の正体」を中心にして、その前に原作者について書き、その後に翻訳者論を置いた。しかしさらにその後に「読者の世界」という掲載メディア論を置くことで、「翻訳する側」から、「翻訳を読む側」へと、視点の移動をおこなった。この視点の移動によって、明示しないまでも、少女漫画の受容とロマンス小説の受容に関連があることがわかり、それは、翻訳というものが果たしていく役割について考えさせる。

すなわち、読者はジャンルで読むのではなく、自分自身の育つ時代や環境、自分自身の性や、年齢に沿った読み方の変化とともに読書するのである。当然、児童書も漫画も小説もアニメもドラマも渡り歩きながら横断するのであって、そこに翻訳書や翻案ものが自然に組み込まれている。読者が作者になる場合も当然、その横断のなかで発想するのであって、そこに、翻訳の影響が社会に深く浸透することになる。しかしこの論が「翻訳の正体」に支えられているために、深く浸透していく翻訳文化とは、大きな取りこぼしや誤解をも含み込んだものであるにもかかわらず、疑いなく、翻訳が互いの文化を豊かにしていくことがわかる。以上の意味で、本章は今までにない翻訳論として評価できる。

一方、この章の第二節・第三節に関する問題点を指摘するとすれば、日本における『小公女』の受容（翻訳論、再話研究を含む）については、学術雑誌に多く論文が出ているにもかかわらず、そういうものがほとんど参照されていないことである。たとえば畠山兆子の諸論文は、ここで扱われている『小公女』の日本における再話、挿絵の問題などと多く重なっているが、参照されていない。参考文献表においても、記載されている日本語文献はほとんどが書籍である。学術雑誌記載論文への目配りが足りない。

とくに第二節で言えば、イギリスの社会階級についての説明が多く、この節の結論を導くのにこの長さは不要である。「翻訳の正体」を説明するのにあまり役に立っているとは思えない。

また第四節についての問題点であるが、少女小説と少女漫画の歴史を長く紹介したその「まとめ」で、簡単に『小公女』との極めて間接的な関わりを示唆するだけになっている。その結果、第一章・第四節の構成は破綻している。第三節で「受容の軌跡」、第四節で読者が少女小説によせる要望の歴史的变化、というように切り離して論じるのではなく、一つの節の中で時系列に沿って両者の相関関係を確認しながら一緒に論じていった方が、論文としてわかりやすくなった。

なお、この章全体で言えば、このあと「ロマンス小説」を語るには、この章で明治から現代までの大人の女性むけの小説を語るべきだった。明治から

ハーレクインロマンス導入の前まで、日本の女性読者をとらえてきた本はどのようなものだったのか、明確にすべきであった。

第2章 ロマンス小説の展開

・概要

1979年から日本でも刊行された西洋の恋愛小説「ハーレクインロマンス」について書かれた章である。冒頭にあるように、少女漫画の世界に求めているものを見出した少女たちが大人になったとき、このジャンルに入るのは唐突ではないことを述べている。

本章では、「ロマンス」の本来の意味、西洋の小説の歴史などを説明する。サミュエル・リチャードソン『パメラ』を事例に挙げながら、手紙文体による即時的な書き方が、実生活に即した小説の成立につながったことを述べる。また、ジェーン・オースティンを事例に挙げながら、その恋愛観が、現代のロマンスコメディ的なロマンス小説につながったことを述べる。またシャーロット・ブロンテを挙げながら、ゴシックロマンスの系譜について述べる。またサー・ウォルター・スコットを挙げながら、新旧の価値観の対立が恋人同士の家の間での対立を生み、悲劇につながるロマンスの型について述べる。さらにスーザン・ウォーナーを挙げながら、「健気なヒロインが、艱難辛苦に耐え、やがて理想の男性が現れて最後は幸福な結婚に至る」というシンデレラストoryが、信仰心に裏打ちされた家庭小説として広まったことを挙げる。

さらに煽情小説と言われたジャンルを取り上げ、オールcottやバーネットがその作者でもあることを述べている。バーネットの *A Lady of Quality* を例に挙げ、煽情小説が勧善懲悪のプロットであること、主人公は目的の達成のためには罪を犯すこともいとわないこと、それは読者の願望の成就を目指すものであったこと、抑えられていた幅広い領域の女の感情の表現し、抗議と逃避の幻想を放出し満足させることによって、女性の読者に強力に訴えかけたことを、述べている。

バーネットを含む以上の小説家の作品の特徴がハーレクインロマンスに流れ込んだことを背景としつつ、ハーレクインロマンスの作家と作品について説明している。それによると、ハーレクインロマンスの特徴とは、情愛的個人主義であり、束縛や抑圧のない同等の愛情による関係である「友愛結婚」に至る「ハッピーエンド」である。

「ロマンス小説の読者」では、12世紀からの「恋愛の発見」の歴史を振り返り、18世紀からの「ロマンティックラブ・イデオロギー」の浸透が西

欧でどのようにおこなわれたかに及んでいる。英国ではそれが「貸本屋」の隆盛期に重なり、「家庭小説」「感傷小説」が流行した。

「ロマンス小説の魅力」では、ハーレクインロマンスの「型」を詳しく説明している。すなわち、二人の前に障害がたちはだかるが、最終的にはそれを乗り越え、感情的に満足できる楽観的な結末を迎える、という型である。さらにその要素として「共感できるヒロイン」「強力なヒーロー」「緊張感」「意外性とリアリティ」「ハッピーエンド」を必須とする。そこには強力な「コード」と「神話性」があり、大衆小説とは、その定型を常に再構築することだという。

・評価

本章はそのすべてが、ハーレクインロマンスの「型」を形成した西欧文学の系譜（すべてではないにしても）と、西欧のロマンティックラブ・イデオロギーと、そして実際のハーレクインロマンスの「型」について述べている。本章だけを見ると翻訳論から離れているが、第1章最後の「読者の視点」からの大衆小説論になっており、大衆小説の仕組みが見える。もとより、日本の基準である「純文学」「大衆文学」という分類は使用されておらず、商品としての小説の視点を、ここでは明確にした。

本論文の特徴である通ジャンルのなものが、児童文学。翻訳文学、少女漫画から、女性大衆恋愛小説に拡がってきて、これが次の章で翻訳の現場の問題として展開する。

本章の問題としては、翻訳論である本論に、本章がいかなる関連をもっているかをつかみにくい点である。随所にその関連を書くことによって、本論を全体に強く結びつけることができたはずだ。

具体的に言えば、第一節「ロマンス小説の系譜」では「友愛結婚こそがロマンス小説が目指すハッピーエンドである」(p. 70)というのがこの節の結論だが、それを言うためにこれほどの詳細な作品紹介が必要なのか、疑問である。「翻訳論」という本論文の大枠における本節（および本章）の意義が明快でないのは、ここに見られるように「不必要な情報が多すぎる」からである。言い換えれば、あまりに枝葉末節にこだわりすぎた結果、「論文にとっての重要性」と「ページ数」のバランスが取れていない。

第二節の「ロマンス小説の読者」では、「文学的評価は低く、「なぜ女性たちはロマンス小説に夢中になるのか」としばしば疑問視される」とあるが、大衆小説は一般に文学的評価が低く、「なんで、あんなくだらんものを読むのか」と疑問視される。かつて漫画も同じであった。ここで、そういったもののなかからとくに「ロマンス小説」を取り上げたのは、ロマンス小説

が冒険小説や漫画とは異なる視座を提供してくれるからであろう。しかしそこが明らかになっていない。ジェンダーの問題がからんでくるのだとすれば、そこははっきりさせるべきだった。

第三節「ロマンス小説の魅力」では、ロマンス小説のヒーローの条件として、「アルファ・メール」という典型例を挙げ、その「傲慢さや強引さがヒロインによって優しさにかわる」という特徴が、「中世騎士物語からの伝統的なヒーロー像」に由来するものであり、日本の（漫画や小説における）ヒーローに欠けている点であると指摘している。しかしそう断ずる際にあげた根拠は、たった二点（三浦しをんと松岡なつきの対談と、谷崎潤一郎の指摘）のみであった。実際、「恋愛を通して傲慢な男が優しさをみせるようになる」という例は、たとえば日本の少女漫画の世界では定型といってよい。古くは『キャンディ・キャンディ』のテリーから、『花より男子』の道明寺司に至るまで、いわゆる「ツンデレ」キャラはほぼすべてこれにあたる。これ一つとっても、三浦と松岡が現状を正確に把握しているとはとても言い難い。

また、こうしたロマンス小説のヒーローの特徴がなぜ女性読者を魅了するのか、という点については、すでにジェンダーの観点から非常に示唆に富んだ分析が行われている。たとえば参考文献にもある Radway の Reading the Romance では、「冷たい男が女によって温かくなる」というパターンは、女性読者に「現実の（冷たい）パートナーも、自分の態度如何で変わる」という幻想をあたえるものであり、その意味で、家族に「労わり」を与える責務を妻・母にのみ押し付ける家父長制度を補強するものだ、と指摘している。こうした分析に賛成するにせよ反対するにせよ、ここでロマンス研究の代表的な先行研究が無視されている点は問題である。

そもそもロマンス小説の分析において「ジェンダー」という観点を抜きにする事はできない。本論文ではヒーロー像についてだけでなく、ロマンス小説全般に関して、先行研究におけるジェンダーにまつわる議論が無視されている傾向がある。

また、読者がロマンス小説を読み続ける理由として、最近のニュース記事を数本あげ、「時事に影響されず必ずハッピーエンドをみせてくれる」からだ」とまとめているが、これはあまりにも単純であり、ロマンス小説の先行研究が、たとえ書名が論文内で引かれていても、きちんと読まれていないことが推測される。

たとえば先に引いた Radway の研究では、ロマンス小説を読者が読み続けずにいられない理由として、単に「ハッピーエンド」に還元できない、より複雑な、そしてより説得力に富んだ社会的理由を、ジェンダーの観点から幾つもあげている。Radway に反対するのであれば、それを記述すべきであっ

た。ジェンダー論を踏まえたロマンス小説の先行研究を万全に組み込むことができれば、この章はより充実した。またそれによって、「ロマンス小説を現代の日本で翻訳する意義」を論じる次章も、より説得力をもったのではないかと思われる。

なお、本章ではリチャードソンの『パメラ』をロマンス小説の嚆矢としているが、それに先行する女性作家のロマンス小説が多数あり、『パメラ』はその影響を多く受けていると指摘されている。また「アメリカでは 1860 年代家庭小説に続き「煽情小説」と呼ばれる類がやはり中産階級の女性が一人で楽しむ物として流行した」（p 65）とあるが、その「煽情小説」（不倫、近親相姦、きわどい性的描写など）の原型がすでに『パメラ』の先行作品として存在している。あとのほうで、「『パメラ』を原点とする感傷小説の系譜には、女性の生き方が模索されている。その表現の仕方が抑制された形から次第に激しく大胆になり、教訓的なものから煽情的なものに変わった」とあるが、『パメラ』の先行作品にそのような作品は多く存在する。

さらに言えば、ロマンス小説に読者の期待する要素としてあげられている条件が気になる。

1. 共感できるヒロイン
2. 強力なヒーロー
3. 緊張感
4. 意外性とリアリティ
5. ハッピーエンド

とあるが、これは主人公が女性か男性かという違いを除けば、ほとんどのエンタテインメントに共通する条件である。また、「ストーリーに反応してゆくだけでなく、ストーリーを発展させるような行動を起こすヒロイン」も同じだ。さらに、「定型の意味」のところでも、展開されるのはロマンス小説の定型というよりは、エンタテインメントの定型論である。また、「主役ヒロインには同時代の女性の等身大が求められる」とあるが、以上の条件を満たし、夢をかなえるヒロインが「同時代の女性の等身大」であるはずはなく、あくまでも理想的なヒロインでしかないのではないかと思う。

「現実逃避型のファンタジー」のところでは、「ロマンスは現実を書くものではない」というマレリーの言葉が引用され、「比較的安いロマンス小説が、人々の癒やしになっていることは間違いない」と結ばれ、また「リアリズムが優先される一般の小説とは違い、現実の出来事に影響されない」とも書かれている。だとすると、ヒロインが「同時代の女性の等身大」である必要もないであろう。実際ハーレクインロマンスには。「東欧から政治的な理由でアメリカに亡命してきた男性作家に恋する、女性ジャーナリスト」「メ

キシコ湾に油田を持つ企業の社長に恋する、女性弁護士」といった設定も多く、「同時代の女性の等身大」ではない作品も多い。

第3章 翻訳小説の展開

・概要

この章が、前章の「ロマンス」および「ロマンチック・イデオロギー」の翻訳に関する問題提起である。すなわち、「日本におけるロマンス小説の受容」つまり翻訳を考えるには、その前提として、日本における「恋愛」の理解から考える必要がある、ということだ。

「テーマの理解」では、ドナルド・キーン、谷崎潤一郎、北村透谷、木下尚江、泉鏡花、厨川白村の『近代の恋愛観』、菊池寛、伊藤整、そしてエレン・ケイ『恋愛と結婚』の翻訳や、スタンダール『恋愛論』の翻訳などを取り上げながら、西欧的な恋愛観がどのように日本に導入され、ぎくしゃくしながら接ぎ木されていったかを書いている。

「ジャンルの成立」では、明治以降に恋愛観念が移入された日本において、1979年にハーレクインロマンスが輸入され、それがどのように展開したかを述べている。書店に専門の棚が設けられ、発行部数が増大し、日本の市場に外国小説部門の一ジャンルとして位置づけられたという。そして国産のロマンス小説が生まれた。しかし「ロマンス小説の伝統のない日本にはロマンス作家は存在しない」という結果になり、翻訳は売れたが、日本人ロマンス作家は育たなかった。一方、翻訳ロマンス小説は、ハーレクインロマンスだけではなく、種々のものが刊行されるようになった。このようにして、翻訳ロマンス小説のジャンルが、日本で成立した。

「翻訳小説の受容」では、「家」「家族」「社会」という普遍的なテーマが、どのように表現されているかを述べている。若松賤子、新渡戸稲造、エマニュエル・トッドを例に挙げながら、欧米と日本の家族観の違いについて述べる。そこに、ノースロップ・フライの、「主人公が自分の属する社会から孤立させられる悲劇的結末」「主人公が自分の属する社会に包摂される喜劇的結末」という分類を関わらせ、ハッピーエンドを「社会に包摂される」プロットと位置づける。それこそが、実生活に即し、現実希望を与える物語だという理解が、ロマンス小説的理解であるようだ。

「ロマンス小説は勸善懲悪の構成であり、その世界自体が道徳的である」という指摘も興味深い。これが、ロマンス小説は西洋恋愛小説の『水戸黄門』、という表現になる。

・評価

いわばこの章は「大衆文学論」なのだが、翻訳における大衆文学論は今までなかった。翻訳が生まれた後には、翻案小説が成立し、やがてそれが国産の文学になっていくという経緯を、日本ではこの400年たどってきた。しかしこの章で明らかになったのは、ロマンス小説は国産化が起こらない、という事実である。国産化が起こらなければ、翻訳の定着と拡大が起こるのか？ どうやらそうらしい。しかも翻訳文学という、エリート階層のものだったジャンルが大衆文学となり、定型をもって、まるで時代劇のように作用している。恋愛の悲劇的結末が多かった日本の物語世界で、喜劇的結末の恋愛ものが受け容れられ拡大する。これが、ここでいうストレンジャーとの出会いとなっている。翻訳とは何か。それは必ずしも、『小公女』がたどったように、本質的な部分（階級）が意図的でなく隠蔽され、誤解されながら、本能的に翻案されて広まるだけではない。「家」「家族」「社会」という普遍的な問題における「違い」を知りながら、そのまま受け容れ、楽しむという翻訳の世界があり得るということだ。そのような翻訳の世界を、ここでは提示できた。

しかしながら、タイトルと内容が合致していない。内容に合うのは、「恋愛小説からロマンス小説へ」といったタイトルではないだろうか。第一節「テーマの理解」というタイトルも、「恋愛観の変遷」の方がふさわしい。

内容の問題点としては、第一節について言えば、ここで展開されている、西洋と日本の「恋愛」観の齟齬が、日本におけるロマンス小説の受容・生産にどう影響をあたえているのか、が説かれていない。言い換えれば、論文の他の部分とこの箇所が、有機的に結びついていない。第三節「翻訳小説の受容」の問題としては、最後の頁（115頁）で、「本研究対象は、いずれも女性の日常的なテーマが扱われており…これらを読むことはアメリカのホームポジションを抑えることにつながる」とあるが、ここまで述べてきたことから、このように結論づけるのには無理がある。たとえば、『小公女』にみる孤児になったセーラの体験は、現在の日本女性の「日常的なテーマ」といえるのだろうか？ また、ロマンス小説を読むことが「異国のホームポジション」を抑えることにつながると論じるに足るほど、アメリカ発ロマンス小説の世界と現代日本女性の生活環境の「違い」が、分析されたわけでもない。本節もまた、論文の他の部分（『小公女』論とロマンス小説論）と有機的・論理的にうまく結びついていない。

「本論で追求した『小公女』および「ロマンス小説」は、本国で人気を博し、なおかつ世界中で読まれている」という指摘は間違いはないが、このふたつから「これからの翻訳受容を展望」してよいのか、疑問である。つまり、

この場合の「翻訳」がロマンス小説以外の作品をふくむのかどうか、いわゆる文学作品やノンフィクションをふくむかどうかということである。

p 4 で「上記二点の考察の結果から、読者に求められる翻訳小説の魅力を示す」とあって、その結論が、「翻訳小説が読まれなくなっている今だからこそ、新たな読者の拡大のために、その理解の基礎となり興味を呼ぶような大衆的なものを受容することが望まれる」という翻訳への展望は物足りない。

終章

・概要

ここまでたどった経緯を述べながら、「今後の課題」を示している。たとえば「多種多様な作品の中から、これらが選ばれた理由を示すには至らなかった」という課題が指摘されている。翻訳とは選択である。そこには受け容れられる、という予想や、受け容れられなくとも翻訳する価値がある、という価値観が作動する。その選択基準はなにか、基準の変遷はあったかなど、確かにそのテーマも重要であろう。

「翻訳によって、何かは失われるが、何か新しいものも生まれる」という指摘も大切だ。翻訳を読む者は、何が失われているか気がつかない。それを裏返せば、加わった豊かさも意識せずに受け取っていることになる。それは著者が言うように、「翻訳固有の魅力を具体的に主張できる方法」を開発することによって、読者に伝わるであろう。

・評価

終章は主に、書いてきたことを振り返る章であるからやむを得ないが、量が少ないように思う。何が重要かということ、自分自身が論じてきたことの「評価」である。つまり、書けなかったことについての「今後の課題」だけでなく、書けたことの位置づけと評価が必要であった。

しかしそれは、もっとも難しいことでもある。距離をもって自身の論文を読み、評価するには時間が必要だからだ。

また、結論は書いているが、『小公女』と「ロマンス小説」というふたつのテーマについて、単に大衆的に流布した翻訳、という共通性を指摘するだけでは、足りなかった。ジェンダーの問題、大衆小説メディアにおける読者の行動、という2つの観点での強いつながりを感じるからである。自身がこの2つのテーマを選んだという事実をもとに、もっとテーマの根源的関連を指摘してもよかったように思う。

論文全体の評価と審査結果

主査、副査ともに「問題点」として挙げた点は、全体の構成に見える「バランスの悪さ」であった。

この問題には理由がある。論者はまず『小公女』による翻訳論を執筆した。次に、翻訳書のリーディング作業を通して翻訳書の現状を分析する必要を感じたことから、大衆翻訳小説であるハーレクインロマンス論を展開することになった。自らの中で重なっているこの二つのテーマを、論文として構成しようとしたとき、歴史的な観点から両者をつなげる必要が生じた。そこで、ロマンス小説論をあいだに置くことによって、構成した。

しかし、客観的にはテーマの異なる二つの論文を一緒に構成するには、その動機となる自らのなかの連続性を問い詰め、全体を貫く論理にしなければならない。この場合、その論理の柱になると思われるのは、「ジェンダー論」「翻訳論」「読者論」のいずれか、あるいは全てである。本論文は翻訳論、読者論を含んでいるが、読者論とともに駆動しなけりなかつたジェンダー論を欠いているために、一貫性が弱くなった。

しかし一方、本論は二つの役割を果たした。冒頭の「この論文の方法と意義」で述べたように、まず本論は翻訳論として、一定の役割を果たしている。作品がどのように翻訳されたか、原作の背景と、翻訳の背景にはそれぞれいかなる歴史があり、原作者の背景と翻訳者の背景はどのように異なるかを、書くことができた。その上で、翻訳書が「翻訳できなかつた部分」を鮮明に指摘した。それは社会背景の違いに起因しており、受容者の社会常識に拠っている。つまり翻訳は、翻訳された社会の状況に依拠するのである。その点を明確にした。

二つ目は、大衆翻訳小説論の可能性を示したことである。『小公女』を翻訳として論ずるだけでなく、アニメ、テレビドラマにまだ及んで、多様なメディアにおける翻案の展開までみる必要があることを示した。

また、そのことと少女漫画まで視野に入れることによって、そのジャンルの読者がハーレクインロマンスにつながる可能性を示し、その側面の数少ない論のひとつとなった。

日本のほとんどの近代文学は、イギリス、ドイツ、ロシア、フランス、アメリカなどの翻訳を通して成り立っており、それはエリート層の作家による小説群を生み出す土壌になった。しかし本論は児童雑誌に連載された児童文学や、もっぱら女性に受容されてきた大衆ロマンス小説を取り上げている。そこに本論の特徴がある。すなわち、初めての翻訳大衆小説論が、本論にお

いて成立している。それが本論の意義である。

しかし決定的な翻訳論を書くのであれば、やはり、そのエリート層の作家たちによる翻訳や翻案、翻案から生まれた新しい日本文学をも、対象にせざるをないだろう。そこに、日本の大衆小説を生み出した翻訳や、翻訳だけで成り立っているロマンス小説のようなジャンル、そして、国産の大衆小説も生み出したが、その内容と質において大きな違いがあるミステリーやSFなどが論じられていれば、まさに追随を許さぬ、決定的な大衆翻訳小説論になったであろう。

今後の方法としては、ひとつには『小公女』論を、多様なジャンルに展開し翻案されたその状況まで含めて執筆し、古典翻訳本の現代における展開と大衆化に迫る著書にすることである。

もうひとつは、本格的なハーレクインロマンス読者論を執筆することである。この論は、ジェンダー論なしには成り立たない。現代世界において「女性読者」がなぜ成立するのかという論は、女性のもつ普遍的な幻想を明らかにすることになり、極めて重要な論になるであろう。

このように、本論はさまざまな問題点があるとはいえ、今後の可能性を示唆する重要な問題提起を含んでいる。

以上の理由で、本論は博士論文として、世に問う価値のあるものであり、博士論文の認定をしてさしつかえないものと判断する。